横須賀水交会

22年度定期総会を開催

6月4日（金）よこすか平安閣において平成22年度定期総会が開催された。

中尾幹事の司会により、物故者に黙祷を捧げた後、会則の規定により長崎会長を議長として、3議案について審議が行われ、いずれも賛成多数で了承された。

その概要は次のとおりである。①21年度活動においては、39名の新人会員があり、年度末において680名の会員数であること、また、各活動は概ね計画どおり実施され、順調に推移したこと。②新役員の選任については、会則改定により常務幹事に事務局長を設け、本多副会長が兼務することになったほか、7名の新役員、2名の退任があり、顧問5名及び幹事67名の体制であること。③22年度活動計画については、本部事業計画に基づく6項目の活動方針を定め、ほぼ例年と同様の活動を推進すること。

なお、質疑において、海外派遣艦への激励品の贈呈が22年度から中止されることを残念との意見があったものの、予算の確保が難しく、予算案は現計画のまま了承された。

一般討議においては、新たな「水交会定款」及び「支部運営規則」の制定に基づく「横須賀水交会会則」の改定について、土井幹事長が報告した。21年度総会において中間報告がなされていたこと、また、旧会則との変更点を併記しわかりやすい説明であったことから、参加者には十分な理解が得られたものと思われる。本会則は「支部運営規則」の規定に基づき、21年9月から施行することが承認された。

その後、新入会員の紹介、叙勲者の紹介を行った後、最後に保井幹事より連絡事項として、「日米安保条約改定50周年記念講演会」及び「夏期防衛講座」の案内並びに水交会発刊「苦心の軌跡　第1巻　射撃」の申し込みについての紹介があり、充実した総会を終了した。

総会に引続き、「海上自衛隊の現状」と題して、横須賀地方総監　松岡海将による講演が行われた。

講演は、①海上自衛隊の抜本的改革の概要②横須賀地区整理統合事業の2部構成により行われた。

抜本的改革では、「心身ともに健全で足腰のしっかりしたプロ集団たる海上自衛隊」を改革方針と定め、「物先行型から人・物均衡型の海上防衛力への転換」を基本方針として、改革の3本柱「装備と人員のバランスの取れた体制への変換」「プロフェッショナル養成態勢の再構築」

発行　平成22年7月14日
編集　横須賀水交会事務局

横須賀水交会主要行事予定

11月までの主要行事予定は、次のとおりです。なお、最新の情報は横須賀水交会ホームページ(http://y-suikoukai.daa.jp/)を御確認下さい。

1　防衛諸団体合同夏期防衛講座

（1）期日　8月21日（土）
講話　1600～1730
懇親会　1745～1900
（2）場所　記念艦「三笠」
（3）講師　前防衛大学校長　西原　正　氏
（4）演題「こんな日本でいいのか」

2　幹事会

（1）期日　9月11日（土）
（2）場所　未定

3　部隊研修

10月（計画中）

4　第21回ゴルフ大会

11月（計画中）

「活気みなぎる組織の再生」を推進するため、海上自衛隊に求められている①組織の見直し②運営の再構築③隊員の充足④精神的内面の充実の４点について改革を推進していると述べられた。

21年度は予算の制約があるものの、規則など施策（環境）を見直し成果をあげつつあること、また、22年度は環境の見直しを継続しつつ人の育成を図るとの報告がなされた。隊員の意識調査結果から、海外派遣艦艇を経験した乗員ほど「部隊に活気がない」「生活への犠牲感」「処遇への不満」等の意識を持っており、抜本的改革を推進し、隊員の内面的充実を図りたいとの強い決意が感じられた。

横須賀地区整理統合については、関東自動車の移転に伴う跡地利用等を含め、防衛省・海上自衛隊と横須賀市が連携し、潜医隊、大矢部弾庫の移転など、船越・田浦・比与宇地区への集約化が計画されている。計画では16年度に開始し、26年度までに整理統合が完了する予定であり、現在順調に推進されている。横須賀地区は敷地が分散していたが、集約化により、後方支援態勢の充実・効率化など、横地隊の能力向上が期待される。

講演終了後会場を移し、小泉国会議員、横須賀市長代理沼田副市長等の一般来賓、杉本自衛艦隊司令官、松岡総監等部隊指揮官及び先任伍長など、多数の来賓の臨席を得て、懇親会が開始された。長崎会長の力強い挨拶に続いて、総理指名の国会を終えて駆けつけた小泉議員から

は、野党として、新内閣の安全保障等をチェックし、防衛政策の改善に

貢献するとの宣言が、また、沼田副市長からは、市長メッセージを代読して、良好な海上自衛隊と横須賀市の関係を継続するとともに水交会に対する期待のこもった祝辞が、また、杉本司令官からは、海外で活躍している艦艇、航空機、とりわけアデン湾での活動について、諸外国の海軍から高い能力評価を得ているとのうれしい報告と支援に対する謝辞が述べられた。

引き続き、来賓紹介、祝電披露へと進み、そして、松岡総監の音頭で高らかに乾杯し、懇談に入った。会場のあちこちで現役と会員との交流の輪が広がり、楽しいひと時を過ごしたが、永田潜水艦隊司令官の発声による万歳三唱をもって、名残惜しくも散会した。（岩永幹事　記）

総会懇親会における会長挨拶

横須賀水交会会長　長崎　嘉徳

小泉衆議院議員、沼田横須賀市副

市長、渡辺防衛大学校副校長、杉本自衛艦隊司令官、松岡横須賀地方総監、永田潜水艦隊司令官　はじめ部内外から多数のご来賓のご臨席を頂きまして誠にありがとうございました。

先程22年度の総会も無事終了し、又その後実施されました講演では横須賀地方総監から「海上自衛隊の現状について」の有意義なご講話を頂きました。重ね重ね厚く御礼申し上げます。

さて、現在海賊対処法により海上自衛隊の艦艇がソマリア沖に派遣され多大なる功績を挙げ国益に寄与している事は周知の所であります。

一方我が国の周辺海域を見ますと韓国哨戒艦艇が北朝鮮の魚雷攻撃を受け撃沈され、東シナ海では海底油田をはじめとする海洋権益の争奪で日中の摩擦が顕在化しており、又先般警戒監視中の海上自衛隊の艦艇に中国海軍の艦載ヘリコプターが異常接近し挑発的な行動を行なう等緊迫した情勢が連続生起しており、自衛隊とりわけ海上自衛隊の日夜に亘る緊張の連続した任務は想像に絶するものがあるのではないでしょうか。

国政に目を転じますと新たな防衛計画の大綱の策定が先送りされて来ましたが今年になって有識者による防衛力に関する懇談会が発足されたところで有ります。今回の大きなテーマは集団的自衛権の解釈と武器輸出三原則の検討とされているようでありますが、この会の有識者の中には座長をはじめとし安保、防衛問題の専門家はほとんど不在と言われており、さらに現政権下でこれらの見直しに踏み込んだ提言が出来るかどうか。むしろ防衛力が抑制の方向に向かう恐れ無しとしません。

防衛予算面では自民、公明連立政権当時から年々減少が続いている所へ新装備品の調達を抑制する等事業仕分けのようなパフォーマンスで処理されては後方面での人の面、装備の面でも我が国の経済界を含めたトータル的な防衛力の低下が危機的な状況になって来ているのではないでしょうか。

国防は国家百年の計にしてと言われて居りますが、国内の防衛力基盤を強化するには少なくとも武器輸出三原則を本来の姿に戻す政策が喫緊の課題ではないかと思うところであります。

今年の夏は参議院選挙の年であり、縷々申し上げました国防上の問題等をはじめとし国政の場で「国防、外交、教育」に正面から取り組む熱意を持った政治家をご参会の皆様方の力で送り出そうではありませんか。終わりに陸、海、空自衛隊の益々の精強を祈念し、ご参会の皆様方のご健勝ご活躍をお祈り申し上げ私のご挨拶と致します。　横須賀水交会の皆様には、平素から横須賀所在の部隊や機関に対しまして格別のご支援、ご高配を賜りまして、心から厚くお礼申し上げます。

海洋観測艦「ふたみ」自衛艦旗返納式参加

3月17日(水)、横須賀港吉倉岸壁において、海洋観測艦「ふたみ」の自衛艦旗返納式が横須賀地方総監松岡海将執行により実施された。

杉本自衛艦隊司令官はじめ、各級指揮官、隊員及び沼田横須賀市副市長ほか一般市民参列の中、横須賀水交会からは長崎会長はじめ10名余の会員が参加した。

横須賀音楽隊の演奏のもと、自衛艦旗降下、艦長 西村一昌2佐から松岡総監へ自衛艦旗が返納され、同艦は任務を全うした。

防衛団体の多数の列席があり、従来の自衛艦旗返納式に比してかなり盛大であった。

「ふたみ」は昭和54年2月就役、31年にわたり、この間、総航程、59万マイルにおよぶ海洋観測業務に従事し、特に音響観測に貢献した。

「ふたみ」の地味ながら、立派な

功績を称え、歴代艦長はじめ、乗組員の御尽力に心からの敬意と賛辞を捧げたい。ご苦労様でした。ありがとうございました。

（本多副会長　記）

海洋観測艦「しょうなん」横須賀初入港

3月19日(金)10時00分前、海洋観測艦「しょうなん」(艦長:西嶌　聖2佐)は、3，000トンの艦ではあるが、そのバウスラスターと旋回式推進装置を駆使して、タグボートなしで、横須賀港吉倉岸壁にスマートに係留した。

同艦は3月17日同岸壁で除籍行事が行われた海洋観測艦「ふたみ」の後継艦で、岡山県玉野に所在する三井造船玉野事業所において、平成21年6月21日進水、2日前の平成22年3月17日に完工、引渡し行事を終え、横須賀に初入港したものである。

入港後直ちに、入港歓迎行事が松岡横須賀地方総監執行により実施され、海洋業務群司令をはじめ、各級指揮官、隊員、そして、吉田雄人横須賀市長他一般市民、家族、防衛諸団体の会員が参列した。横須賀水交会からも、長崎会長他多くの会員が、自衛艦旗小旗、水交会旗を掲げて参加した。

行事は、乗組員が岸壁に整列した後、艦長入港報告、横須賀市長挨拶、花束贈呈と進行し、最後に西嶌艦長の「しょうなん」という艦名のとおり、美男、美女の多い艦であり、しっかり任務に邁進したい。」というユーモアのあるお礼の挨拶で締めくくられた。

同観測艦は新式の海洋観測装置を搭載しており、今後ますます必要性が高くなる海洋関係データの収集等、海洋観測分野で、重要な役割を担う艦として期待されている。

以後就役訓練等を実施した後、夏以降、本格的な任務に就くとのこと、同艦の今後の活躍を祈りたい。

（道家幹事　記）

海賊対処3次隊　護衛艦「たかなみ」帰国、出迎え

3月18日、ソマリア沖アデン湾において、第3次海賊対処の護衛活動に従事していた部隊(指揮官:第4護衛隊司令　中畑　康樹1佐)の護衛艦「たかなみ」(艦長:澤口　和彦　2佐)と「はまぎり」(艦長:斎藤　貴2佐、大湊)が任務を終えて、横須賀に入港した。昨年10月出港、11月上旬から現地で護衛活動を行い、2月22日に任務を終了し、この度帰国したものである。

松岡横須賀地方総監執行による帰国行事は、長島防衛大臣政務官、小泉衆議院議員、横粂衆議院議員、沼田横須賀市副市長、海上保安庁警備救難部長、日本船主協会関係者、杉本自衛艦隊司令官ほか各部隊指揮官、隊員、家族など多数の出迎えがあり、横須賀水交会からは長崎会長ほか多くの会員が参加し、自衛艦旗小旗、水交会旗を掲げて出迎えた。

司令帰国報告、内閣総理大臣特別賞状の授与、大臣政務官訓示、自衛艦隊司令官訓示、来賓紹介などの行事は整斉と進められ、両艦乗員の逞しく、凛々しい態度は、任務を完遂した誇りに満ちており、頼もしいものであった。

3次隊は、34回、283隻の船舶

を護衛し、安全に航行させた。公表された資料によると、3月12日現在までの累計護衛実績は６９２隻に及んでいる。

同隊は、ジプチ共和国において、海賊対処の傍ら、ボランティア活動を通じ現地と交流していることが伝えられている。学校を訪問し、日本の文化等の紹介により、現地の子供たちとの心の通った交流行事が行われていることが写真に掲載されている。

海賊対処は、実際の対処場面も多々あったことがうかがえ、厳しい環境で現場での緊張などは計り知れないことと推察します。

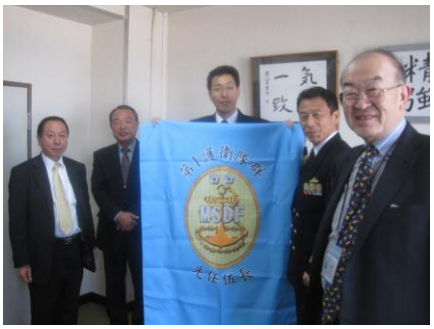
国際的な責務を果たし、国益に寄与した指揮官及び乗員各位に対して、深甚の感謝と敬意を払います。

お疲れ様でした。短期間かと思いますが、休養され英気を養ってください。

（本多副会長　記）

先任伍長へ激励品贈呈

かねて、水交会から、各部隊等先任伍長へ激励品として、特製のテーブルクロスが贈られているが、今年は群レベルの部隊先任伍長へ贈呈されることで、4月8日（木）、横須賀水交会本多副会長、土井幹事長、白川幹事が部隊を訪問し、第1護衛隊群先任伍長　斎藤曹長、第2潜水隊群先任伍長　熊谷曹長、掃海隊群先任伍長　八尾曹長へ贈呈した。



それぞれ山下群司令、籠谷首席幕僚、松本群司令が立ち会いのもとで行われ、先任伍長の激励となり、和やかな懇談の場を持ちことができ、現役と水交会の絆が深まった。

（本多副会長　記）

逸見岸壁完成
「しらせ」帰港にあわせ披露

4月15日（木）午後、横須賀港逸見岸壁完成披露行事が松岡横須賀地方総監主催で行われた。砕氷艦「しらせ」が南極観測支援の任務を終了し、9日東京晴海に帰国、15日横須賀へ帰港するのに合わせ、杉本自衛艦隊司令官はじめ各部隊指揮官等が参列して、盛大に行われた。

吉田横須賀市長、県議会議員、市議会議員、防衛関連団体など多数の参列者の中、横須賀水交会は十数名が参加した。

新岸壁は、長さ３５３Ｍ、幅２８Ｍ、水深11Ｍであり約５年の歳月を経て完成したものである。あめクラスの護衛艦なら縦に２隻が接岸でき、ヘリコプター搭載護衛艦「ひゅうが」は余裕を持って接岸できる。

岸壁の先端部に、ヘリポートも完成し、今回ＳＨ―６０Ｋ型ヘリが着陸・離陸し完成披露に花を添えた。

この岸壁及びヘリポートの完成は、横須賀の基地能力向上となり部隊運用に資するところ大であり、大変喜ばしいことである。（本多副会長　記）

海賊対処、ソマリア沖へ
「むらさめ」出港、見送り

5月10日、護衛艦「むらさめ」（艦長　菅野正隆2佐、乗員約１９０名）は、海賊対処法に基づき、ソマリア沖アデン湾へ向け、横須賀を出港した。第1護衛隊司令　篠村靖彦1佐が指揮官で、5月8日大湊を出港した護衛艦「ゆうぎり」とともに現地へ向かい、5月下旬に「おおなみ」及び「さわぎり」と交代し、任務に就く予定である。

松岡横須賀地方総監執行による出港行事は、楠田防衛大臣政務官訓示、杉本自衛艦隊司令官訓示、花束贈呈、第1護衛隊司令出港挨拶、乗組員乗艦など盛大に挙行された。司令の「誇りと気概を持って、任務に就く」との力強い挨拶が印象的であった。

横粂衆議院議員、吉田横須賀市長、山下市議会議長はじめ各級指揮官、隊員、海上保安庁警備救難部長、家族、防衛関係団体、日本船主協会などに加わり、横須賀水交会からは10数名が参列し、激励した。

横須賀音楽隊の演奏の中、スマートに離岸、出港、帽振れにあわせ自

衛艦旗小旗や各会の旗が振られ心のこもった見送りが行われた。

防衛省のホームページによると、ソマリア沖の海賊対処は、５月７日までに累計１３４回、約８００隻におよぶ護衛を実施しており、日本選手協会はじめ関係各国、護衛された船舶から特段の感謝をされている。

海賊発生件数は増加傾向にあり、海上交通路の安全ひいては、国益のため、長期にわたり時として危険を伴い、厳しい気象条件において、任務行動をする部隊に対し心からの敬意と感謝を捧げたい。武運長久と任務達成を祈る。（本多副会長　記）

練習艦隊横須賀入港、歓迎

５月12日（水）練習艦隊（司令官：徳丸伸一　海将補）が、近海練習航海の最終寄港地である横須賀に入港した。

横須賀水交会旗、湘南水交会旗をはじめ各支援団体の旗が翻り、横須賀音楽隊と練習艦隊音楽隊が交互に演奏する和やかな雰囲気のなか練習艦「かしま」、護衛艦「さわゆき」、練習艦「やまぎり」の順に整斉と吉倉岸壁に接岸した。

昨年度前まで近海練習航海は幹部候補生学校卒業前に行われる（その１）と卒業後に行われる（その２）に分けて実施されていたが、今年度から卒業後にまとめて実施されることになったため、約１ヶ月遅れの入港になった。

同艦隊には、第60期一般幹部候補生課程終了者１８８名（内女性９名、タイ留学生１名）を含む約７２０名が乗艦している。

岸壁では横須賀地方総監松岡海将はじめ各級指揮官等多くの隊員、吉田市長等多数の来賓、各支援団体が出迎えた。横須賀水交会からは本多副会長、顧問等多数の会員が参加した。

入港直後に行われた入港歓迎行事は、市長の歓迎挨拶、花束贈呈、司令官の挨拶等短い時間であったが、心のこもった歓迎行事であった。

同日夕刻、同市内において横須賀市、横須賀市議会、横須賀防衛協会、横須賀商工会議所、海上自衛隊横須賀地方総監部共催の遠洋練習航海部隊壮行会が行われ横須賀水交会からも長崎会長以下約20名の会員が参加した。壮行会は会長である吉田市長から練習艦隊・実習幹部に対して温かい激励から始まり、和やかな雰囲気の中で進められた。歓談を通じて実習幹部の意気込みを感じ、頼もしく感じた。

壮行会終了後、場所を移して司令官、各艦長、先任伍長等を招待して横須賀水交会主催の歓迎夕食会を催した。約30名の会員が参加し近海練習航海の労をねぎらい和やかに懇談した。

練習艦隊は５月19日に横須賀を出港し、東京晴海に回航、５月26日から10月下旬まで約５ヶ月の東回り世界一周の遠洋練習航海に鹿島立ちす

る。今年は日米安保改定50周年にあたり、パールハーバー、サンフランシスコ、サンディエゴ及びボルティモアと米国の寄港地が多くなっているようである。また海上自衛隊が海賊対処で活躍しているソマリア沖・アデン湾も航海する。

航程は、昨年度より４，５００海里ほど長い約２８，５００海里であり、厳しい練習航海となると思うが、実習幹部が国際的視野を養い心身ともにたくましくなって帰国されることを祈りたい。安全なる航海を祈る。

（上田幹事　記）

護衛艦「はつゆき」「さわかぜ」自衛艦旗返納行事参加

６月25日（金）横須賀港吉倉岸壁において、護衛艦「はつゆき」（艦長：下野　善彦　２佐）、「さわかぜ」（艦長：森崎　真司　２佐）の自衛艦旗返納行事が梅雨の晴れ間の夏を思わせる中、松岡横須賀地方総監執行により行われた。

杉本自衛艦隊司令官をはじめ各部隊指揮官等部隊関係者、横須賀市副市長、横須賀市議会議長等官公庁関係者参加の中、横須賀水交会会員をはじめとして各防衛団体等も多数参加し盛大な式典となった。特に「はつゆき」「さわかぜ」に縁のある方々は三々五々昔話を語りあうとともに、除籍を迎えた年月に考え深げの様子であった。

行事は、横須賀音楽隊の国家吹奏のもと、両艦の自衛艦旗降下に始まり、横須賀音楽隊の軍艦行進曲にあわせ各艦乗員の退艦、松岡横須賀地方総監への自衛艦旗返納、総監訓示、来賓紹介と厳粛かつ整斉と実施された。

松岡横須賀地方総監の訓示では、両艦の業績を詳らかにするとともに、その業績は歴代艦長以下乗組員一同が不撓不屈の精神を持ち、一丸となって任務達成に邁進したとして、海上自衛隊の対する貢献に謝意を表すとともに最後の乗組員の労をねぎらった。

さて、両艦の業績について訓示から引用させてもらうと、護衛艦「はつゆき」は、昭和57年3月23日国産システム艦及びオールガスタービン艦1番艦として就役した。横須賀、大湊そして横須賀と転籍もあり、今日までの約28年間護衛艦隊の中核として活躍した。その間護衛艦隊及び横須賀地方隊の年度優秀艦として4回の表彰、昭和63年には航空機無事故着艦8，000回達成による第2級賞状、平成2年には同10，000回達成による第2級賞状を受賞している。更に観艦式に3回、米国派遣訓練・RIMPACに4回、外洋練習航海に3回参加、総航程67万8，051マイル、総航海時数6万1，513時間に及んだ。

一方、護衛艦「さわかぜ」は、昭和58年3月30日「たちかぜ」型護衛艦の3番艦として就役した。1番艦、2番艦に比べ、近代化された戦闘指揮システムを搭載し、佐世保の第2護衛隊群に編入、平成19年3月15日護衛艦隊直轄艦となった。今日までの約27年間、護衛艦隊の艦隊防空の中核として活躍した。その間護衛艦隊年度優秀艦として8回の表彰、観艦式に9回、米国派遣訓練・RIMPACに6回参加、総航程69万1，913マイル、総航海時数5万5，453時間に及んだ。

ここに、両艦の輝かしい業績を称

え、歴代艦長はじめ乗組員のご尽力に深甚なる感謝と敬意を捧げたい。

（廣江幹事　記）

【投稿】

護衛艦「はつゆき」除籍に際して

顧問　海野　幹郎

昭和52年度予算で建造、57年３月に就役し、国産システム艦「はつゆき」型12隻の１番艦として活躍した「はつゆき」も、28年余の艦隊勤務を終えてついに平成22年６月25日に横須賀にて艦旗返納式が行われた。

この艦の予算要求時に海上幕僚監部武器課武器体系班でその搭載武器システム全般を担当した関係があり、かつ、そのＦＭＳ調達時には在米日本大使館の防衛駐在官として米海軍と契約書（ＬＯ）の交渉をする立場になったという因縁もあり、その他いろいろな思い出があり懐かしく思う艦なので、除籍に際しその栄光の航跡をまとめてみた。

付け加えれば、それに初めて搭載したＵＹＫ-２０コンピューターについては、基幹要員として米国ユニバック社にて４カ月の研修を受けたと云う関係もあった。

「海上自衛隊50年史」を紐解いてその時代背景を振り返えってみると、当時海幕としては多くの優秀な人材が相当のエネルギーをこの艦の計画・調達に費やしていることが判る。

長くなるので細部は省略するが、昭和52年と云う時期はポスト４次防の最初の年でいろいろな装備品が整備される時期でもあった。８艦８機体制は、その頃発想され、現在の護衛隊群の編成、すなわち対潜中枢艦（ＤＤＨ（対潜ヘリ３機搭載）×１）、防空中枢艦（ＤＤＧ×２）、基本構成護衛艦（ＤＤ（対潜ヘリ１機搭載）×５）の編成が考えられ、１個護衛隊群を常に即応態勢に維持するには、４個護衛隊群が必要と云う考え方で、現在の態勢が作られている。その基本構成護衛艦としての要求性能から造られた１番艦が「はつゆき」であった。

搭載武器の細部は省略するが、戦力化に苦労した技本開発の射撃指揮装置２型（ＦＣＳ-２）、軽量コンパクトな高性能短ＳＡＭシステム２型-２、プロジェクトチームを作って開発した戦闘指揮システム（ＣＤＳ）のＯＹＱ-５（ＵＹＫ-20コンピューター使用）、初めて導入・調達装備の艦対艦ミサイル　ハープーンＳＳＭ、対潜ヘリとのオペレーションを考慮したソーナーＯＱＳ-４等の新しい装備品が多く、その戦力化には苦労があった。

船体関係では、何といっても海上自衛隊初めての舶用ガスタービンエンジンの搭載、それに伴う可変ピッチ・プロペラ（ＣＰＰ）の採用をあげておく必要があるだろう。加えてＤＤに対潜ヘリ搭載のための飛行甲板等の設計上の配慮、復元性能向上のための上部構造の軽量化、振動騒音対策、動揺抑制等の多くの設計上の考慮がなされて造られている。

先日、護衛艦「はつゆき」の除籍記念懇親会に招待されて、稲田秀穂初代艦長始め「はつゆき」に関係したＯＢや現役の人たちに会う機会があった。まさしく、当時の海自の代表的な艦として多くの優秀な人達が元群・隊司令、元艦長・各科長、元乗組員として関係していることが判ったが、その中には、その後の元海幕長２名、元自艦隊司令官２名も参加しておられ、「はつゆき」が海上防衛の第一線と云う任務を達成しながら凄い人材の育成にも立派にその役目を果たしてきたことが強く感じられた。

最後の第23代艦長となった下野善彦２佐に会っていろいろ話を聞く機会があったので、それをまとめてみると、次のとおりである。

１　在籍期間は、28年３カ月（昭和57年３月就役、平成22年６月除籍）

２　航海時数等は、総航海時数約６万２千時間、総航程約68万マイル

３　主な実績等は、観艦式３回参加、米国派遣訓練４回、外洋練習航海３回災害派遣・捜索救難15回（三宅島災害派遣等）、広報業務64回等

４　表彰実績48回（護衛艦隊年度優秀艦３回、地方隊年度優秀艦３回を含む。）

特筆すべきは、第２級賞状２回（航空無事故８千回及び１万回）そして平成21年度には護衛艦隊年度優秀艦と護衛艦隊射撃術科優秀艦に選ばれ、射撃専門の下野艦長はそれを大変誇りにしていた。そして最後に第３級賞状（永年にわたる功績）を受賞して有終の美を飾っている。

人生もそうだが、物事にはすべて終

わりがある。艦もその任務を終え、除籍廃艦となるのは寂しいがやむを得ない。

「はつゆき」の残した実績と栄光は、永遠なれ！

海賊対処４次隊「おおなみ」帰国、出迎え

7月2日午後、ソマリア沖アデン湾において、第４次海賊対処の護衛活動に従事していた護衛艦「おおなみ」(指揮官第６護衛隊司令　南　孝宣1佐、艦長:大久保幸彦2佐)が任務を終えて、横須賀に入港、逸見岸壁に接岸、帰国した。

1月29日横須賀を出港、2月下旬から、現地で護衛活動を行い、6月上旬、5次隊と交代、任務を終了し、この度帰国したものである。僚艦の「さわぎり」は7月1日佐世保に入港した。

松岡横須賀地方総監執行による帰国行事は、長島防衛大臣政務官、吉田横須賀市長、海上保安庁警備救難部参事官、日本船主協会関係者、杉本自衛艦隊司令官ほか各部隊指揮官、隊員、家族など多数の出迎えがあり、横須賀水交会は長崎会長ほか多くの会員が参加し、自衛艦旗小旗、水交会旗を掲げて出迎えた。

司令帰国報告、内閣総理大臣特別賞状の授与、大臣政務官訓示、自衛艦隊司令官訓示、来賓紹介などの行事は整斉と進められた。

乗組員は、任務を完遂した誇りに満ち、頼もしい雰囲気であった。

4次隊は、累計32回、２８３隻の船舶を護衛し、海賊行為を抑止し、安全に航行させた。

7月2日現在、第5次派遣海賊対処行動水上部隊までの累計護衛実績は１４９回、９９５隻に及んでいる。

海賊対処は厳しい環境において連続して緊張を強いられ、実際の対処場面もあり、そのご苦労は大変なことと思います。

関係各国から高い評価を受け、国益に寄与した指揮官及び乗組員各位に対して、深甚なる感謝と敬意を払います。お疲れ様でした。有難うございます。

（本多副会長　記）

馬門山旧海軍墓地で墓前祭

5月15日（土）午前9時30分から10時の間、初夏を思わせる好天の中、新緑薫る横須賀市営馬門山墓地（旧海軍墓地　横須賀市根岸町1―5）において第55回馬門山墓地墓前祭が行われた。

墓前祭は、遺族関係者を始め横須賀市長、市議会議長及び有志議員、海上自衛隊からは横須賀地方総監部幕僚長及び各艦隊幕僚長等、並びに主催6団体（大津地区町内連合会、横須賀水交会、隊友会横須賀支部、大津観光協会、大津地区社会福祉協議会、晨洋会）関係者及び一般市民等３００名にのぼる多数の参加を得て厳粛に執り行われた。なお、今回初めて国会議員の横粂勝仁氏が参列され慰霊に努められた。

横須賀水交会からは、長崎会長以下約30名が参加し心から哀悼の意を示すとともに式の盛会に貢献した。

主幹事は、前述の主催6団体が毎年持ち回りで努めており、今年は大津地区町内連合会が主幹事を担当した。

式次第は、一同拝礼の後、国歌斉唱、大津地区町内連合会会長及び吉田横須賀市長の追悼のことば、儀仗隊拝礼、献花、弔銃発射、最後に黙祷を捧げるという流れであった。なかでも海上自衛隊の儀仗隊拝礼及び弔銃発射は節度と威厳に溢れ整斉とした儀式の醸成を図っていた。

当墓地には、軍艦「河内」、「筑波」の殉難者を始め、先の大戦の戦死者等1，５９２柱の英霊のほか一般市民も埋葬されている。

事後の主催6団体の反省会において、事務局から、墓前祭は年々参加

者が増大し盛会になっており各主催団体の協力に感謝する旨のお礼の言葉があった。なお、来年度は横須賀水交会が主幹事を努める。

（小島幹事　記）

「海軍の碑」記念行事を開催

横須賀水交会は、海軍記念日の5月27日(木)12時から12時20分の間、横須賀ヴェルニー公園内に在る「海軍の碑」の前において、平成22年度「海軍の碑」記念行事を実施した。

本碑は、近代海軍創設及び成長の歴史とともに発展した横須賀市のシンボルとして平成7年全国の海軍関係者及び有志からの浄財により建立されたものであり、記念行事は、平成13年までは海友会が、海友会と横須賀水交会が合同した平成14年以降は、横須賀水交会が毎年5月27日の海軍記念日に執り行っているものである。

当日は、快晴に恵まれ、横須賀水交会会員及び旧海軍の先輩等約50名の参加を得て整斉と執り行われた。

次第は、ラッパ「君が代」の伴奏（CD）による国旗及び軍艦旗の掲揚に始まり、海軍戦没者の英霊に対しての黙祷、長崎横須賀水交会会長の挨拶、引き続いて、碑の建立委員長でもあった常廣元横須賀地方総監から「もし日露戦争においてバルチック艦隊が来なかったなら」（後述）と題して、氏の鋭い洞察力に基づく仮説として陸軍、海軍そして日本国がどのような変遷を辿ったか非常に興味深い内容の講話を拝聴した。

最後に鎮魂の譜「同期の桜」「巡検ラッパ」「海ゆかば」を傾聴し、短時間ではあったが終始厳かであり海軍の業績を偲ぶと共に海軍の英霊の追悼と永遠の平和希求に相応しい記念行事であった。

行事終了後、参加者は、記念艦「三笠」での記念式典へと向かった。

（小島幹事　記）

【記念講話】

「もし、バルチック艦隊が来なかったら」

元横須賀地方総監　常廣 栄一 氏

単なる荒唐無稽な話ではない。前年のこの場所で話したように、いくつかの「派遣なし」になる可能性の機会があった。そのこともあって、敢えて歴史上のタブーに挑戦する。

● 思い起こしていただくためにその可能性があった機会を再度見ておこう。

1　開戦直後に、東洋に艦隊を派遣

すべきか検討がなされた。海軍当局は、旅順要塞の支援下で戦艦８隻を有する旅順艦隊で十分に日本艦隊に対応し得るし、且つ隣国ドイツとの微妙な関係から、本国の海軍力を空にすべきではないとの意見が皇帝に了承された。「派遣なし」に決められていた。が、緒戦の打ち続く敗北に業を煮やした皇帝は、その10日後には決定を覆して、派遣を令している。

2　黄海海戦後、当局は戦勝の公算が少ないと考えて、派遣取り止めを進言すべく考えたが、開戦時の決定破棄に鑑み、この時は進言を取りやめている。

3　旅順艦隊消滅後に当局は派遣中止を進言するが、皇帝は同意せず、第3艦隊の編成増派となった。この時は、ノシベにあったロジエストウエンスキー長官は、日本艦隊が準備できないうちにと早期の進出を計画したが認可されなかったこと、更に足手纏の第3艦隊を押し付けられ、合流のために劣悪な環境のノシベでの長期の停泊継続を余儀なくさせられたこと等から、ノイローゼ気味となり、辞表を提出までしている。無論却下された。

このように、派遣取りやめの機会はあった。が独裁皇帝のメンツ或いは意地によって、強行された。勝利の公算は薄く、死地への前進しか許されない前進、そして完敗、21隻の艦船と5千人の喪失といった、独裁国家なるが故の悲劇、正常に機能する国家ならば多分おきなかったであろう悲劇といえるのが、日本海海戦であった、という話をした。

以上は、前回の復習です。

●　ここで、「もし」直接責任を有する海軍当局の意見が入れられて、バルチック艦隊がこなかったなら、どうなったであろうかという今日の本題に入る。

日本海軍の完全勝利は勿論ない。さすれば、『本土には一歩も敵をいれていない、戦争はこれからだ』との強気のロシアに対して、ルーズベルト大統領の講話斡旋はない。継戦意志を表明する強気のロシアは、満州への陸軍兵力の増強を急ぎ、総司令官を強気の将軍に更迭し、陸上戦闘の逆転を期する構えを着々と構成しつつあった。

対する日本側は、弾薬を中心とする後方支援能力が限界に達し、特に第一線の若手将校の多数喪失の補充がままならず、これ以上の攻撃は困難といった状態にあって、奉天の線を最前線に陣地を構築して、対峙する方針を取っていた。児玉総参謀長が、奉天会戦直後に、政府に講和促進を強く働きかけるために帰国したのもこのためであった。

かくてロシアが、雨季前の6月に攻撃を仕掛けてくると、日露の兵力比は、29個師団対45個師団で戦うことになり、雨季明けの9月になると、29個師団＋α（若干の増強はあろう、数より質の問題で、大幅な増強は不可能）対50個師団になることが予想された。

さすれば、守勢に立たざるを得ないわが方は、じりじりと後退を余儀なくされ、最終的に遼東半島を橋頭堡とする線で対峙する形になるであろう。わが海軍は健在で、後方線の確保、陸上砲撃支援等は、十二分に可能で、この線での持ちこたえは可能と考える。

この対峙の状況が続き、米国等の仲介によって講和が成立することになろう。日本側への条件は、満州からの撤退は当然として、韓国における権益も失うことになるかもしれない。

強硬なロシアは、旅順を含む満州に戦前同様な権益を確保する強い意向を示すであろうが、英国の意向も受ける米国の反対で、難航することになろう。

いずれにしても、日本は、北海道から台湾までの完全な島嶼国家になることになろう。

とすると、その後の日本の進むべき道はどうなるであろうか。海洋国家として、進まざるをえないことは当然であろうが、いかなる形の海洋国家になるであろうか。以下は単なる憶測による私見に過ぎない。

●　いかなる形の海洋国家になるであろうか。

海洋国家として、海洋国家群との協調のもと貿易立国を目指すか（現在の形）、太平洋を挟んで、米英との対立に向かうか（前大戦前の形）当時の帝国主義を基調とした列国の動向から、後者になるであろうと考えられる反面、日露戦争に引き分けに近い敗北を喫し、2～3等国に留ま

っている筈の日本としては、米英との対立を避け、前者に近い形にならざるを得ないのかもしれない。

以上は、全くに私見に過ぎないが、いずれにしても、日本海海戦がなかったなら、現在の日本は変わった形になっていたことは間違いないところであろう。

第20回横須賀水交会主催ゴルフコンペ

去る6月9日(水)、第20回横須賀水交会主催ゴルフコンペを千葉房総半島の鹿野山ゴルフ倶楽部にて開催しました。

当日は天気予報からすると曇りの予定でしたが、あいにく午前中小雨が残り、雨天というコンディションでのコンペとなりました。しかしながら長崎会長以下61名のゴルフ愛好者が天候を気にすることなくプレイに熱中しておりました。

61名の参加者のうち75歳以上7名、最長老77歳満尾哲郎氏、70～74歳13名と70歳以上が参加者の三分の一を占めていました。皆さん年齢や天候に関係なくゴルフを楽しんでおり、ゴルフはやはり健康に役立つという印象を受けました。今回も陸自出身者一名、民間からの参加者が3名、会員夫人1名あり、会員、海自OBの親睦だけではなく、ゴルフを通じて横須賀水交会の活動を広報するという目的を達することができました。

また、男性だけのコンペでは活気や華やかさがないことから、女性の参加を募りましたところ妙齢の3名の参加者があり、コンペの雰囲気を大いに盛り上げてくれました。

競技はダブルペリア方式で実施しましたが、優勝を斉藤進氏がグロス86、ハンディキャップ16、ネット70で勝ち取り、2位には阿部正氏、3位西村義明氏という成績でした。

ベストグロス賞には、シニアの部（65歳以上）近藤義美氏がグロス73で，ジュニアの部(65歳未満)中尾誠三氏がグロス81で、ウーマンの部安藤恵子氏グロス93で受賞しました。

会員の親睦を目的としたゴルフ大会ですが、水交会会員のみならず、陸海空自衛隊のOBや友人・知人・家族まで幅を広げて参加者を募り，水交会の活動に理解を深めていただければ幸いと思っています。たくさんの方に声をかけて参加者を増やしていただくようご協力よろしくお願いします。

（持永幹事　記）

春の叙勲受章者

次の会員の方々が叙勲を受けられました。

（敬称略）

春の叙勲

瑞宝小綬章　小田　優秀
〃　永田　真晟
〃　福塚　啓二
〃　藤川　耕一
〃　和智　保

（土井幹事長　記）

訃報

本年1月以降、次の会員が逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

将木基之(幹予5)　1月12日
山口　毅(高船68相当)　1月28日
柴田光保(事務官)　2月6日
西本勝昭(幹候16)　5月22日

（本多事務局長　記）

新(編)入会員（2月～6月）

次の方々が横須賀水交会に新たに入会（編入）されました。

（敬称略）

金子　慎也(幹候27)　菊地　友二(舞教09)　矢野　義昭(有志)　浅野目　正人(幹候19)　伊藤　千代志(部内91)　久保木　一郎(幹候22)　久保田　守(幹候27)　廣田　恵(技官)　石渡　裕久(有志)　吉村　秀一(有志)　山浦　光明(幹予88)　安達　国平(幹予96)鹿野　貞喜(部内15)　長谷川　修(横教177)　佐藤　充(横教153)　清水　亮三(幹候28)　松田　睦宏(幹候19)　高杉浄治(幹候28)　船水　隆(有志)　大久保文男(幹候28)　服部　雅光(事務官)

（河村幹事　記）